

10. 均衡分析

10.1 静学的モデルにおける部分均衡分析

← 市場の労働供給曲線

均衡賃金

← 市場の労働需要曲線

均衡労働量

10.1.1 競争均衡の効率性

企業余剰

(消費財市場の「消費者余剰」に対応)

労働者余剰

(消費財市場の「生産者余剰」に対応)

もし $w^1 > w^*$ が「市場賃金」とすると

社会的損失

企業が実際に雇う雇用量

10.2 応用例：移民受け入れの効果

- 移民がネイティブ労働者（国内で生まれた労働者）と完全代替的な場合

この水平方向への距離が
移民による労働供給の増加分

ネイティブの雇用は L^0 から L^N に減る。

- 移民がネイティブ労働者と補完的な場合
（移民の労働市場とネイティブの労働市場が異なる）

移民の雇用によって
ネイティブによる労働の
限界生産性が上がる。

10.3 複数労働市場の競争均衡モデル

複数の関連する労働市場の存在

- 労働者と企業の移動を通じて、
一つの労働市場で何らかの原因で生じる
均衡賃金と均衡雇用の変化を和らげる。

隣接する二つの地域 A と B の労働市場（移動費用はゼロと仮定）

最終的に

両市場で賃金が等しくなるように
移動を通じて需給調整
(もし移動がなかったら、 w_A^1 で均衡)

10.4 応用例：最低賃金法の効果

最低賃金が適用される市場
されない市場

まず、単一市場では

次に、最低賃金が適用される労働市場(A)

されない (B)

(単純化のため、企業の移動は考えない)

(a) A で発生する失業者の一部が B へ移動する可能性

(b) B の労働者が、より高い賃金を得ようとして、A へ
移動する可能性

但し…

10.3 と違う点は、

需要と供給が一致するように賃金が調整されないこと。

→ A に移ったからといって、雇用されないかもしれない。

$$(A) \quad (1 - P(U))\underline{w} + P(U) \cdot 0$$

$$(B) \quad w^B \\ (\text{確実に})$$

リスク中立性
の仮定

均衡では両者が
等しくなっている。

$$(1 - P(U))\underline{w} = w^B$$

ここで、 $\underline{w}$ は外生変数だが、

$P(U)$ と w^B は内生変数。

(一つの式から、二つの未知数を求めることは出来ない)

$P(U)$ の決まり方のモデル化が必要。